

## 序

奈良時代末期に創建され平安時代に入って10世紀ごろまで存続したと見られる西隆寺の名は、これまでも文献の上では知られていたが、その詳細は不明であった。この寺が西大寺に近い右京一條二坊を寺地として、金堂と南大門とが南北の一直線上に配置され、金堂東南に塔があったことは、西大寺旧蔵の古図によって知られ、寺域の広さや伽藍配置の模様はおおよそは推定されたとしても、発掘調査によってそれが実際に確かめられるまでにはいたらなかった。

たまたま1971年春、寺跡推定地の一部にショッピングセンターと銀行が新たに建てられることになり、奈良県教育委員会ではこの新事態に対応して西隆寺跡調査委員会を特設し、寺跡の発掘調査保存について慎重に検討するとともに、奈良国立文化財研究所に委嘱して発掘調査の作業が進められた。発掘は1971年3月から約2年間、6次にわたって行なわれたが、委員会が最も留意したのは発掘によってはじめて検出された寺跡の一部を破壊から護り、これを新たに建てられる営造物の中でどのような可視的状況の下で保存するかにあった。委員会は数次にわたる協議検討の結果、保存の成案を作り、これを開発者側に示してその同意を得、寺跡の一部を近代建築の内部に展示するという新しい保存方式を実現することができたのである。

西隆寺跡の全面的保存が寺域の市街化のため不可能になった今日、たとえ不十分にしろ寺跡の一部を開発の中に保存を組み入れるというやり方で、若干の地下遺構を残し得たのは今回が最初の事例であり、古都奈良にふさわしい埋蔵文化財の処理の仕方であったと考えている。

なお旧寺地にある諸企業、教育施設が本委員会の意図をよく理解され建築設計の上で協力を惜しまれなかったこと、また国立文化財研究所研究員諸君の多大の労苦に対して、本委員会は厚く感謝の意を表する。

西隆寺調査委員会代表 吉村 正一郎